

## 親和女子大学の国文学科・国語国文学会・「親和国文」など

—在職した七年間を中心に—

蜂 矢 真 郷

このほど、神戸親和女子大学国語国文学会が解散され、それに伴って「親和国文」が最終号になるとのことである。それで何かを書いてほしいとのことで、かなり苦慮したが、「何か」とあったこともあるので、私が在職した七年間（一九七五年度から一九八一年度まで）の頃の記憶を中心に、検索したことも些か含めて、それより前の知っていることや、それより後の若干をも合わせて、「何か」を書き記すこととお許しいただきたいところである。それが些かの記録となるならば、幸いである。

親和女子大学（神戸）が上に付くようになるのは一九九四年度からであり、この頃に「神戸」や「京都」が上に付くようになった大学はいくつかある）は、一九六六年四月の開学であり、その年の三月に京都大学文学部を退官された遠藤嘉基先生（国語学）が学長になられた。遠藤先生が学長の時には、先生が会長であった訓点語学会の事務局が学長室に置かれていたそうである。学長を辞任された折に、名誉学長になられたとのことである。

京都大学の定年は、もともと六十歳であったが、六十三歳に変更されたので、遠藤先生は定年退官ではない（ネツト上には「定年」とあるものもある）。よって、開学の時、遠藤先生は京都大学の名誉教授ではなかった。後に、定年でなくても年限を満たしていれば名誉教授になれるように規程が改正され、それが遡って適用されることに

なったので、一九七四年六月、名誉教授になられた。その折に名誉教授になられた方には、池上楨造先生（教養部、国語学、後に大阪大学、定年後は南山大学）や、他にも多かったが記憶にあるのは蜷川虎三元京都府知事である。一九六五年の一月三日であったか、私は一回生ながら京都大学国文学会に参加して、池上先生と遠藤先生との講演（今で言う最終講義に当たる）を拝聴している。

開学の折には、事務局長に、文部省におられた桑門俊成先生（国語学）が、教授兼任で着任された。後に、一九七四年九月、桑門先生は第四代学長になられた。一九八〇年三月、桑門学長が、任期満了とともに教授をも辞任された。次の学長には、島居清先生（近世文学）が、学生参加を含む全学一致の選挙によって選ばれたが、理事会がこれを承認せず、学長事務取扱として発令して変則状態が続き、新聞等でも報道されるに至った。その後、島居先生は胃腫瘍のため入院・手術されて、一月に事務取扱を辞任された。後に、島居先生が第六代学長になられたのは、一九八四年四月のことである。

私が着任したのは一九七五年四月であり、その時、桑門学長から学長室で辞令をいただいた（何年か前に、その辞令を見つけたことがある）。何年か後に「桑門くわかとの喉乾のどかわく」という回文を作り、国文学科の先生方に披露したことがある。よく喋る方であったので、それなりによくできた感じがしたものである。

私が着任した年、国文学科から、桑門学長の他に、植垣節也先生（上代文学）が教務部長に、国枝利久先生（中世文学）が図書館長になっていて、その上に、組合の選挙の結果、乾裕幸先生（近世文学）が委員長に選ばれ、さらに、国文学科主任であった島居先生と、着任したばかりの私とが執行委員に選ばれてしまった。その後、島居先生は、法人の理事・評議員の改選の結果、理事に選ばれて組合を抜けたが、その後任はまた国文学科の唐井清六先生（近代文学、小久保伍先生の後任）が選ばれて、皆大変であった。それでも、乾委員長率いる組合の中は朗らかであった。しかしながら、乾先生は過労から体調を崩されて、年度途中で退任され、その後の交渉はなかなか進ま

なかった。何年か後に、植垣先生が組合の委員長に選ばれた年もある。その時も私は執行委員であったが、何とも大変であった。

大学と理事会とはどうも折合いがよろしくなくて、その年度だけではなく、およそ年末から年度末にかけての忙しい時に、いろいろややこしいことがよく起こった。最も大変だったのは、組合が、不正給与の改善を訴え続けている、スト権を確立しても交渉による解決が程遠いので、ついに一日ストライキを決行したのに対して、組合の委員長と前委員長とが処分され、それで、頼りになる弁護士さんと相談しながら、多くの書類を書き、地方裁判所と労働基準監督署とで何年か対処しなければならぬ時であった。なお、当時は、国鉄などのストライキは普通にあることであった。

開学の時は、国文学科と英文学科の二学科で、一九七二年度から児童教育学科が増設された。その少し後の一九七五年度から、学生数が増やされ、確か学費も上げられた。私が着任した年度は、一回生だけ学生数が多く、そして、それから三年間、年度ごとに学生数が増えて行った。組合は、交渉により、各課と附属図書館の職員や用務員をそれぞれ一名増員させ、また、教員が受け持つ授業数に制限（教授と助教授・講師とは異なる）を設けて、それを超えると増（加）担（当）手当を出すようにさせた。

ホームページには、当時も《文学部》であったように記されているが、その頃に「文学部」とは全く言われていなかった。その頃、「親和女子大学研究論叢」の英語表記の中に「College」とあったことと無関係ではないと見られる。私が転出した後であるので正確なことを知らないけれども、二〇〇五年に発達教育学部ができる時からか、あるいは、もう少し早く、二〇〇二年に大学院文学研究科ができる時からか、文学部と言われるようになったかと思われる。

さて、「親和国文」は、創刊号が一九六九年三月発行である。遠藤先生が「祝いのことば」を、島居先生が「発刊の辞」

を書かれている。一九七四年四月発行の第八号は「桑門俊成教授還暦記念号」であり、一九七五年二月発行の第九号は「島居清教授華甲記念号」である。私が着任した一九七五年度は、第十号であるが記念号ではなく、私と、私と同時期に着任された村上隆彦先生（近代文学、藤井守先生（漢文学）の後任）との二篇と、島居先生の短文とが掲載された、比較的薄いものであり、言わば、新任の挨拶の号のようなものであった。その前の二年に記念号が二度発行された後であったので、記念号にはしなかつたものかとも見られよう。その後の第十二号が「国語国文学会創立十周年記念号」であつて、そのこととの関係もあろうか。さらに後に、一九八二年度一二月発行の第十七号は「江文也教授古稀記念号」であり、一九八四年一二月の第十九号は「瀨江文也・島居清両教授記念号」（瀨江先生の退任と島居先生の古稀・学長就任を記念する）である。一九八五年一二月発行の第二十号には、「親和國文」総目次（第一号―第二十号）が、また、一九九五年一二月発行の第三十号には、「執筆者論文一覽（親和國文第1〜30号）」が掲載されている。

一九八三年一二月発行の第十八号から、各ページの「二段組」が一段組に変更され、活字も大きくなつていく。そのことは、帝塚山学院大学に転出された乾先生の後任である櫻井武次郎先生（近世文学）が書かれた「編集記」に詳しい。ただ、注は二段組のままであったが、かなり後に（第二十九号からか）注も一段組に変更されている。因みに、「編集記」は、第十号に「編集室から」とあり、その欄のない号もあるが、第十三号から「編集後記」で、第十七号から「編集記」とある。後に、第二十七号に「後記」とあり、第二十八号からまた「編集後記」のようである。

第三号（一九七〇年一〇月）・第四号（一九七一年三月）は同じ年度に二号が、第五号（一九七二年九月）・第六号（一九七三年一月）・第七号（一九七三年三月）は同じ年度に三号が刊行されている。詳しい事情を知らないけれども、その頃は一年に二号を刊行することを目指したかとも思われる。

発行月が一二月に落ち着くのは、第十三号（一九七八年一二月）からである。これは、櫻井先生の御意見によったものである。一月から三月の間に発行すると、年鑑などに年と年度との差があることがあって混乱することがあり得るので、年末までしておく方がよいとのことであった。確かに、今、参考文献を「氏名（西暦）」のように書かれると、それは年度ではなく年を表していることになる。なお、はるか後には一二月より遅くなったものがある。右は、いくらか調査したところもあるが、全ての号を確認した訳ではないので、誤ったことを記していないかと恐れている。

私が「親和国文」に論文を書いたのは、第十号「形状言の重複の一形態」（一九七六年二月）、第十二号「動詞ツクをめぐる語群」（一九七八年一月）、第十五号「ハ（端）をめぐる語群」（一九八〇年一二月）、第十六号「モドロカス考——モデルとマダラとの間——」（一九八一年一二月）が親和女子大学に在職中のものであり、その後、第四十一号「国文学会創設四十周年記念号」「ト「利」をめぐる語群」（二〇〇六年二月）、第四十四号「メ「目」とその周辺」（二〇〇九年一二月）がある。

私は親和女子大学に七年間在職したが、その間、「親和国文」に四回、「親和女子大学研究論叢」に三回執筆している。平均して一年に一度書いていることになる。しかしながら、それらが皆よい論文であったかどうかは、また別の問題である。とりわけ、「ハ（端）をめぐる語群」は、英語学の先生からおもしろかったと言っていたこともあるけれども、それを書いた頃には、一音節語を検討する際にはアクセントを考慮に入れなくてもよいというような誤った思い込みがあつて、後にそのことに気づいたものである（つい先日、この論文を参考文献に挙げられた御論考があつたので、右のことを申し上げたが、それに対して別の御意見をいただいたこともあつた）。

そして、大きく後に、いろいろ手を加えて、「形状言の重複の一形態」は『国語重複語の語構成論的研究』（一九八四年四月、塙書房）の一部となり、「モドロカス考（副題、略）」は『国語派生語の語構成論的研究』（二〇一〇年三月、

同」の一部になっている。

「親和国文」には、執筆するだけではなく、編集の役も何度かした。当時は活版印刷であるので、今とは異なることも多いであろう。近年、印刷所の技術が落ちていくものに多く出会うことが思い合わせられる。私は、中高六年間、新聞部において、地方新聞社の印刷営業部を中心とする印刷所によく通っていたので、当時の活版印刷には些か馴れていることもあり、印刷所の技術などが気になるようなことも多い。そうした意味では、よい印刷所であった。

そう言えば、「親和国文」の「卒業論文題目一覧」は、当初、卒業生の氏名の五十音順であったが、十二号から「指導教員別」に変更したのは、乾先生の提案によることであった。

「親和女子大学国語国文学会会報」に執筆したことも、その編集をしたこともある。着任した年度の「会報」の編集は、乾先生と二人の担当で、先生のお宅で校正をしていて、空白を埋めるのに、乾先生の発案で、言葉遊びの類を多く書き込んだ記憶がある。その後、「会報」に原稿を書いたことも二度ほどある（その一度は、余白を埋めるためであった）。全く知らない卒業生に「会報」の原稿を依頼したこともある。

「会報」九号から、国文学科の先生方の著書を御自身が紹介されることが始められ、その延長で、十一号には、児童教育学科におられた小倉豊文先生（日本史学、国文学科の「日本仏教史」を担当されたこともある）に、「近著三つに就て」を書いていただいたものなどは、貴重であると思われる。小倉先生が、私が卒業した高校の元先生であったことを知ったのは、はるか後のことであるので、小倉先生にお伝えしてはいないことである。

この頃、国語国文学会の総会・研究発表会・講演が開かれ、大学院に進学した卒業生の研究発表や、新任の先生の講演があったこともある。

国語国文学会が活躍した記録として、「親和国文」も、そして「会報」も、その内容を機関リポジトリ等によって残しておいてほしいと思うのは、贅沢なことであろうか。

私が着任した年度の途中に文芸部が作られて、唐井先生が顧問になられた。暫くして、謄写版印刷の新聞「しらほあ」が作られるようになった。白樺派を揶揄してバカラシと言うことがあったそうであり、恐らくは、そのことを唐井先生の授業で聞いた学生が文芸部の中心にいたのではないかと思われる。それで、バカラシならぬアホラシを逆にして「しらほあ」と名乗り、白樺派の後を追おうとしたのではないかと見られる。翌年の第六七（合併）号に何か書くことを求められ、「次から次へ」という題で、「次から次へとは別のところで、こだわりつづけて行きたいと思うのである。」と書いたことがある。

図書館長をされた後に兵庫教育大学に転出された植垣先生の後任である毛利正守先生（上代文学）や、帝塚山学院大学に転出した私の後任である山崎福之先生（国語学）とは、萬葉学会等でよく会うようになった。とりわけ毛利先生は、ともに岐阜県出身であることもあり、よく話す関係であった。その後、毛利先生は金田一京助賞を、山崎先生は日本古典文学会賞を受賞された。渕江先生（中古文学）は、ずっと非常勤講師として来ておられたが、神戸商科大学（後に合併して兵庫県立大学）を「停年」になられてから専任になられた。小久保先生や、私の前任の穂田定樹先生（国語学）は、それぞれ年は異なるが大谷女子大学（現、大阪大谷大学）に転出された。佛教大学に転出された国枝先生の後任は大坪利絹先生（中世文学）である。こうして見ると、他大学に転出された方がかなり多いことが改めて知られる。そう思っていると、遠藤先生も大谷女子大学（前掲）に、桑門先生も大阪成蹊女子短期大学（現、大阪成蹊短期大学）に転出された。後に、村上先生も佛教大学に転出され、後任は佐藤和夫先生（近代文学）である。それ以降の人事については、詳しく知らないことが多く、原則として省略させていただきたい。

一九七九年度末からかと思われるが、島居先生の発案で、国文学科の教員と助手とが春休みに旅行に行くようになった。その折に転出される先生がいる場合には、後任の先生も加えて、送別と歓迎を兼ねた行事であった。

先に「原則」としたのに反することであろうが、近藤要司先生（国語学）のお世話で、二〇〇九年九月に三宮サ

テライトキャンパスで第九十二回国語学叢史研究会を開いていたことがある。近藤先生とは、彼が京都大学二回生の時から知合いであり、国語学国文学専攻に進まれることも未定であって、将来こんな関係になるとは思えないことであった。

もう一つ、厳密には国文学科のことでないが、合わせ記しておきたいことがある。

大阪俳文学研究会が、大谷篤藏先生の大阪女子大学定年退職記念だったかに、大谷篤藏氏編『謡曲二百五十番集索引』（赤尾照文堂）を出版することになっていたが、香川県高松市の牟礼印刷に行つて最終校正をする際に、鳥居先生から急遽手伝いとして駆り出されたことがある。鳥居先生の他に、櫻井先生と、転出された乾先生と御一緒であった。新幹線や宇高連絡船などの切符や宿泊の手配等のいろいろは、京都市の古書店である赤尾照文堂の御主人が世話された。活版印刷の終わり近くのことである。

その索引は一ページが三段に分けられていたが、その中に一段の行数が他の段より多い箇所が何ページもあり、それは私が直したところである。多い人数でする仕事は、方針が人によって異なることがしばしばあり、一つのページに同じ語が二回ある際にどうするかについて、方針が異なるものを見つけてしまった結果である。

そして、一九七八年であったと思われるが、『謡曲二百五十番集索引』が発行された後に、赤尾照文堂が記念パーティーを開かれ、その会場は、京阪四条（現、祇園四条）駅の近く、南座から通りを隔てて北にあるビルの中の「キエフ」であった（一九七二年に加藤登紀子の父親が開いた店で、一九七一年に京都市とキエフ市とが姉妹都市になったのでキエフと名づけた由であるが、今ならキーウとするのがよいものであろうか）。一九六九年に「お前とは喋らん」と言われた先生が、私と話した時でもあった。

（大阪大学名誉教授）